

特67

435

教

教道  
主元

信

悟

問

答

全

019552-000-2

特67-435

信悟問答

是信 居士/述

M24.3

ABG-0324



序

竊に案ずるよ二種深信の義たる真宗門の金科玉條

よして是れ出離の正因かり故に人皆そ此本旨に迷

ひ異執紛々其歸するところを知らず一日法友堀江

至信一書を携へて至る曰くされ我師岡本法院居士

よを受るところなりと余拜讀數過宿霧頓よ開け

て金林月澄むが如く更に疑情あることかゝ加之老

幼婦女をして解し易らゑめんがよめ假に問答四

十條を設く其言卑近なると雖も其旨深遠にして高

祖親鸞聖人遺訓の本意に達す氏坐を進めて曰くか





ります。それだと下よ他力眞實の信心と申してあります。ところが少一分り兼ねると存じます。

悟助答云。中興様も誰にせよ我を惡しと思ふ者一人としてあるべからざと仰せられま。たされば我身は惡き者だと思ひつめるは阿彌陀様が知せて下されて思ふてあります。

信平問云。それだと我氣で我を惡む者だと思ひつめるは抑も末て本ハ阿彌陀様が惡む者だと思届けて御さる通りに只順ふて違背せぬが機を信するのであります。そのまれども今ハ御文にもいたづら者と思ひつめてとある前後をよくよく考へてみれば己が己を信知したるよふに聞へて佛が見届けたことさるよ只順ふたばかりのことのよふには存じられませぬ。

悟助答云。成程己が己を信知するは信知するなれども私共が我身を惡人と信せぬは佛が惡人と見届けた外にない思ひなれば實は佛が見届けた通りよ順ふ外乃思

ひぶりはありません。

信平問云。草木でも枝葉が出来花咲實のりて本乃根に於へるは道理であります。今我身を惡む者と思ひつめたも佛が惡人と見届けてござるといふ本へ歸るといふ道理で仰しやるのであります。やうが夫だと機の方の大安心をすへて御教化下されます。御文の趣きよ違ひますよふよ存ぜられます。

悟助答云。大躰機の方を信じます。も他力であります。れば私が我身を惡人だと思ふとは云もの、其思ひも佛から知らせられて思ふなれば知らせられた通りよ順ふて違背せぬが機を信せるとやだと申すのであります。

信平問云。左様に機の方を違背せぬに順ふたが信機だと申して信機の底まで手を廻して佛の方へ推し上げて他力の信機だと仰しやるが夫は他力の眞理を述る事にて機れ方に往生を決定したる安心をすへて信機のつやを尋ぬる私が問とは少一行違ひがある様よ存ぜられます。彼方れ仰せらる、理なれば深信の深の

字の意は佛の見届の意が深ひといふ意に聞へます然し箇様に道理の立合せに  
 なりますと肝要の安心のつやは分らぬ様になりますゆへ現在まゝの心地にて  
 尋ねます御互に悪人でありますれも若今にても死にまゝたらは地獄へ落ま  
 ーやうが夫を歎く氣が有りますれば名號を頼む心も起り又そふると極樂は  
 願ぬ氣も起る若功德を頼む心が有れば回向不定の機とやら若願ふ心が有れば  
 發願邪定の機とやらて共至心信樂の正定聚の機をないと聞まずが歎きと  
 願とが起りますすてあつらう起らぬてありまーやうがそのまゝちぞ知せて下  
 されたひ

悟助答云我身は悪き者と思ひつめる處に早御助けの法の謂れが漏て來て有れば  
 歎も願も起りませぬ之を御出家が二種一具とやら申して常々教へて下されま  
 す

信平難して云く其理は如何に御出家が仰ーやつても私は合点がござませぬ今の  
 文にぞだづらものなりと深く思ひつめて其上に思ふべき様はと有れば機を思  
 ひつめる處に早法の謂れが漏てきて歎きも願も起らぬといふては其上にとあ  
 る御言葉は不用の様になりますではないか機の方のつやをいひ盡さるゝて早  
 法の方乃理を引來て機の方のつやを申されては信機のつやをどうもかすとい  
 うものよなるてとないかと存じますすて初乃機の方乃つやとこふ後乃法乃方  
 乃つやわこうと信機と信法と乃つやをどうもかすを聞せて下されたひ

悟助云く御出家が仰ーやつてもとて早指南も取除けての話なれば中々我等が答  
 ふる譯はまありませぬ善知識ばかりを本とするといふ秘事ではなぬとい  
 うもの々知識の仰せを守りて違背致まると存する故に一先打代りて是からは私  
 が問者となり左様なれば歎きも願もかき信機乃つやはどうて御座るや

信平答云そう荒立すに御聞き下され私も聞學てわあるも乃、我身の後生が一大  
 事なれば御出家が仰ーやるもらと申して只順ふて氣をすめていふことは出來

ませぬ故より一大事にかけて一往は答へませうされば願ひも歎きもなき信機のつやとは譬へていへば裁判官の判決を受たる罪人は早追従も間もあわな後悔も間にあわな合点乃入た處には再び工夫の動くまとなきが如し今信機も我身は悪きいたづら者と思ひつめたる正念よりは早罪は斷り苦を免んとする願ひも歎きもなきことなれば其念々罪惡の我身に積り我として我を計ふ念を失ふること此身に付ては無始已來工夫して計ひくたるも今は工夫も何も盡はて昔を思へばあな愚なりと一身の始末を知りて不定の念に離れ餘念は更になきものなり

悟助問云機を信するは餘念はあいと云はる、が判決のすみたる罪人とても念々監獄乃苦を思ふばかりにはあらじ餘念も定めて起るならん今の信機の人と雖も餘相を見まといふべからば如何

信平答云判決のすみたる罪人は未決のとた乃如く罪に落ると遁れんとて種々様

々の策略をめぐらす等のこと更になし然し妻子職業などのことをも思ふことなるといふにはあらば判決の上には身を遁る、爲には待もれば唯御所置法ばかりあり機を信する人も一切無念といふにはあらば然れども只出離の法に於ては更に計ひなき是を餘相を見まといは申すなりそこで出離の爲には唯佛の御計ひを待といふや

悟助問云機を信するもの出離の爲に法を待とは望の姿は如何よふてありますか  
信平答云判決の罪人が御所置法を待が如し死刑も法なり終身懲役乃至十年一年猶無罪放免も法なり信機乃人も諸法あるが故に己に叶ふの法を待のみてあらず

悟助問云上來の問答にて佛は機の手元を知てござるを目的とて願ふと信機とずると立ると破きたり然るも今も信機の人佛の所置法を待と云はゞ矢張信機の中に佛の法を混淆する様ではないかと存せらる、なりいふや

信平答云上より氏が説ところは信機の處に歎きと願ひとがあるてはなきやと難  
るに付て難を遁ん爲に第二の信法の意を混じたるを破したるなま今いふとこ  
ろはそれとは違ひ二種と分て信機と信法として深信のつやを知せらるゝま  
なれば決して混ぜべからざる譬て云へは判官は一人なれども罪を判せると所置  
を判せると其趣異なれば此を混ぜべからざるが如し所詮罪人を其明判よ因て  
唯己が罪の程と己が所置の程とを合点するのみなま此二種深信の釋も只機の  
方と法の方とをいふが肝要にあらざる我が機乃程と法の程とを會得する決定往  
生の信心こそ肝要なるものなれ

悟助問云氏の語るところを察するよ信機と信法といふ永く次第にして心得る説と  
思はるゝ若夫なれば信機は信法と具せざる信法は信機と具せざる是れ機法混ぜざ  
るは勿論と雖も夫にては他力安心の道理に於て大よ訝かきことあるなり不  
審ハ多けれども今一二を上げは眞宗相傳の一念の信といふも夫ならば二念よ

かりて信機は自力なりといふ人もあり若二念ならば信機ばかりよて命終らば  
往生は叶ふべからざる若信機は自力とせえ他力の安心といふ時は信機は除きて  
信法ばかりにていふまとなるや

信平答云予は上より氏が立る義を察するよ訝かきまと實よ多し故に話を止る  
よ忍びざる意なき人の水掛論ともいふならんされども別して云へえ他力至極の  
金剛心惣して云へハ一乘無上の眞實信海なれば淺き名前よ執じて一往て理解  
を以て窺ふべきまとにあらざる實に涅槃の眞因なり然るに氏の難する様を聞に  
眞宗相傳の一念の信といふは信者の如何なる心地を指して仰せらるゝや又二  
種深信は如何様に心得て自力他力と分別するやまど、言はるゝハ全く氏の疎  
畧の腹心をみづから吐出すことよして即ち予が話を止るに忍びざるところで  
まざる

悟助問云深信といふ其大躰は觀無量壽經の至誠心深信回向發願心と説る三心の

中第二の深心なりそれを善導大佛何の意ありて二種と分て釋一玉ふや二種分釋をなされたる御意を詳に聞んと存す

信平答云二種分釋の其意は一味の深心を決定して一味の往生を得せしめんが爲なす同大師觀經の釋に三心を辨定して以て正因とするとの玉へり其のたりの文を見るよ此三心は彼國に生るる正因なれば心得ねばならぬとの玉ふ思召なれば三心共に機の上に渡りて知りぬ玉ふといへども其中至誠心の下ハ行者の三業の眞實よ付て二種を分けて自力にせよ他力にせよ至誠心といふハ眞實心の事なすと心得よ回向發願心といふも又二種を分けて自力よせよ他力にせよ己が趣く方へ善根を運びて向ふ心と心得よと釋せりそよて至誠心と回向心とハ行人の修行心を本とする釋よて往生の大事を決定する深心の明よふとハ自ら異にして今の深心ハ往生を得と得ざるに在る大切の正因なれば親しく行者は信ざる心に渡りて釋一玉ふ故に三心の明よふりよ至誠心ハ一切衆生の

身口意業の所修の解行等との玉ひ回向心ハ過去及び今生の身口意に修する處の世出世の善根等と乃玉へりこの前後二心は行者三業所修乃上よて釋一玉へり深心を釋一玉ふには深心といふハ深く信ざる信なりと惣釋して行者の三業乃沙汰ハ更になり亦二種あり一ハ決定して自身ハ現に是れ罪惡生死の凡夫曠劫より已來常に没し常に流轉して出離の縁あることなりと深く信る二ハ決定して彼の阿彌陀佛ハ四十八願を以て衆生を攝受し玉ふこと疑ひなく慮りなく彼の願力に乗して定て往生を得と深く信るると釋一玉へり然れば深心といふは深く信るる心なりと雖も何物を深く信るるや又信るるつやは如何よふなるやとて其物柄と信のつやとを知りむる爲に亦二種ありとて物柄は無有出離之縁乃者と四十八願攝受衆生乃法との二かりとて信るるつやは決定して深く信するつやありと知せ玉へは淺し浮び動く不定の念よ離れて深く沈みて動いざる澄きたりたる信といふなり此深心を機法よ蒙らせて信るるつやの疊



りなき有様を知りむる二種深信なればは一深心乃性躰を顯さん爲なりされ  
は一深心は二種深信の信相に顯され二種深信の信相ハ一深心の爲よ衆生執着  
の念を離れたる清淨の信相を顯されたり故よ次第二種の信相を以て一念の深  
心の性躰を顯し一念の深心の性躰を以て着相を離れたる次第二種の信相を顯  
す然るよ氏の二難は第一は深心の体性に付く一念の名前に滞りて次第二種の  
信相を難せ第二は次第二種の信相を誤りて一念の躰性たる深心を難せ故よ前  
難と後難とを以て氏が意底を推せハ氏の身証とするものハ唯名前を認て滞る  
妄執の念慮のとなりこれ予の話を止るよ忍びざる所以である予繁きを厭ハ  
故よ氏や根機を盡して質問し玉へ

悟助問云氏や繁きを厭ハばならハ予も出離の一大事なるがゆへに存分よ質問  
せんと存せざれども聖教の指南にあらざれば信を取がたし氏が前段より辨明  
よめよ善導の御釋三心の義を承りたり宜く辨じ玉へ

信平答云三心を辨定して以て正因とするにあれハ皆心念あるまことハ雖も至誠  
心と回向心とを二心ハ三業の所作の上よて至誠心乃有様と回向心の有様とを  
語りて不實乃行業をハ簡びて眞實の行業を示し玉へり然るに中間乃深心ハ三  
業の上よめて揀びて釋し玉ふ有様よらば一深心を機法ハ二種よ分て而も  
常没常流轉のとなれハ往生に望めて三業も企て難き我身なること信知する  
信のつやを勧め次よ攝受衆生ハ願力成就の法を信知する信のつやを勧め玉ふ  
此二種の信心にて深心乃性躰を盡すなり然るに二種といふ中にて往生乃正因  
とするは二者の深信あり一者の信ハ正因の信を發起する人の自身の程を信知  
する信にて往生の正因とするといふことにはあらざ

悟助問云成程一者の信ハ自身ハ無有出離之縁と信する信なれば直に往生の因と  
ハいひ難し二者の深信ハ己が往生乃爲に攝受衆生の四十八願を信する信なれ  
ハ直に正因といふべし然れば一者の信ハ二者の信が爲には踏壇とも云べき

や若然らは予の初よ不審とする所なり宜しく辨明し玉へ

信平答云氏は兎角氣を急きて執着の念を離れざりて難を起せり既よ云まや二種の信相を以て深心の性体を盡せりと氏よ大躰深心といふ往生の正因は本願成就の信心なれば機法一体凡佛不二は深心なり故に成就の佛の手元にて云へハ十方諸有の衆生も同一に成就せしめ玉へる深心なり然るに衆生の手元に於てこそ未得と已得との差別ハあれ一槩におさへて十劫邪計拜まは秘事またハ頼まは秘事などの失を起さしむべからまは先づ願成就の御手元にてハ十方衆生皆同一一味の信心と心得て而も已得の人の深心のつやを明かにし以て未得の人に及ぼすかり然る未得深心の人は此を知らざりて二種次第の上に執まらば故に信機ハ信法が爲の踏み壇だの又信機ハ自力だけといふことあるは皆これ深心未得の人の常は誤る處なり故に他人が正義を究めて勸むると雖も未得の人は執情を以て自ら封じ却て他を是非する事あり唱くべきま多しと雖

も是等ハ往生の大事に極り殊に正義者の化益を妨ぐるまとなれば別して悲まざるを得ざるなり設ひ宗條の學文あまとも已得深心の活眼開けざれば多くハ共に惑を取ん次に已得深心の人に於ては聞名信喜の一念に願成就の佛意は達するが故に思想にこたはる機の信相と法の信相とを判然して而も一深心は義を明かに教へ玉へるを聞に信機は階梯とも自力とも怪まら又設ひ信法は前の信心なると聞とも驚くまとなし其所以ハ信機と信法と前後ありと雖も通徹豁融して互に相離れざる微妙の深心を已得せる胸中なればなり故に眞宗も即身を佛乃教かりと聞とも信心は姿を知るときハ二種差別乃上よ有て罪躰の我身を忘れま故に佛に等しと思ふ見も起らま又念佛は無間の報を招く因と聞とも佛の願成就の法なれば凡夫のいらうべ法よあらまと知りて驚く心も悔む心も更になし唯一心は佛恩を念す故よ已得深心の思ひよ同心の友を勸むるなま此深心の性体は願成の佛智と同性なるが故に凡心と佛心と一なりとも又機法

一体の信心なりとも教へ玉ふ此性躰を知らしめて不斷煩惱得涅槃とも証知生死即涅槃とも玉へり此深心の所以を開ひて己得の人の信のつやを知らしめ玉ふハ穢土と淨土と差別して教へ玉ふ淨土門の常なれば已を貴びて佛に等しと思ふ見も起らざりて如法に教導する人とは却て毒尾の蜂齧が群れて螫が如くする者あり我此人を逆縁の知識として更に惡むべき人とも心得を宜しく察し玉へ

悟助問云氏が辨せるところなれハ機法一体の深心といふ義ハ常に融通無礙といふ理を以て語り又二種深信といふ義ハ常より次第差別といふ義を以て語りて誤りなりと許すや

信平答云氏が心得るとあるハ兎角一偏に滯りて終にハ其偏執より眞實信心乃性體とも失ふに及ぶなり一の深心を辨せらるには融通無礙の理を以て辨せるといふも譯あるまゝにて機法を差別して信相を知せ玉へる二種の深信に對する時

の辨解なや又二種深信といふ義を辨せるときも然り機法一躰といふ一深心を辨せらる對し次第差別といふ義を以て談せるといふなり夫をハ何の意もなく妄りに上の如き問を起すとも許すべきにあらず静らに意を鎮めて質問し玉へ悟助問云氏が陳るところ實に最なり然らハ一深心と二種深信と互に映照して融通といひ又差別といふ其談じ方をきかんと存せ

信平答云抑聖道と淨土とを分別することハ七高僧よりの相傳なり此相傳に隨ふて今も辨明すべし人といふ初頭華嚴終涅槃とこれ此土出現の釋迦如來が最初ハ華嚴經を説き最後入滅の頃ハ涅槃經を説き玉ふ其華嚴經の中ハ心佛及衆生是三無差別と説けり涅槃經にハ一切衆生悉有佛性と説けり此二經に心と説き衆生と説ける二種ハ妙覺の果佛に揀ぶ名なり又心と衆生とを因分の我が上にて説ける名なり又涅槃經に一切衆生悉有佛性と説ける義ハ妙覺の果佛を融通するの義より一切衆生の處に和合して悉有佛性と説玉へハ華嚴經の心佛

及衆生是三無差別とあるも一切衆生悉有佛性とあるも其意一分の差なく此意より一心三觀一念三千乃法門も起り乃至直指人心見性成佛は法門も起りたり故に此等の法義をハ都て娑婆緣起乃法門と名け直に凡夫の心性を押へ置き修行の効に依て研くか又ハ正智を發して頓証するか何れにもせよ此に在て心を起し行を立て自身に具する佛性を證する聖道家の談る處とす世間すべての人の思ひハ大概此の如し故に無常を思へハ心を搜し苦厄に遇へハ願心を發す利鈍智愚人も依て異ありと雖も本心の止る處は皆此法門の範圍に在るなり次淨土門といふハ彌陀ハ欲生我國と誓ひ釋迦ハ願生彼國と教め彌陀は此土よ出世せよして我國に來生せよと十方衆生を喚び玉ひ釋迦は彌陀の淨國を知ら玉ふがゆへに願生彼國と勸め玉へり佛誓といひ佛教といひ何人がこれを怪まん此を以て彌陀の教義をハ娑婆緣起の教に揀んて淨土緣起の教といふ此教は淨土家ハ語る處かり然れハこの聖淨二門分別の判は儲ふ腹よすへ置べし若左

なくして猥がハハ融通無礙を語らハ忽ち淨土門下の罪人とならん故に二門の教則を動さよして融通を語るべし氏が一偏に滯るといふも此教則を越るが故なり

悟助問云成程聖淨二門の教則ハ腹にすへ置べしとの義は最も予が信を抱く處なり然れハ淨土緣起の中に別して眞宗の教義にて一深心を語るにハ融通無礙よりして而も二種深信を對して語るといふ其様を承りたり

信平答云深心の性体と究むれハ一乘無上の眞實信海なれハ娑婆と淨土との境界といはま機法一体凡佛不二の深心なり是を言亡慮絶の信心とハ云ふ言亡すれハ慮絶す慮絶すれハ言亡す如是の譯あるを知らよして氏が平一面も融通無礙と語るとも失なきやと問へり是予が許さる所とす既に緣起の法門にハ聖道淨土相對の教ありと雖も一乘無上ハ深心乃性体は待對を絶するが故に法界中に一心にして二心あることなり氏一心を發起する一心といふは智慧光遍照の

下に凡夫の思慮生ぜざる間を發起の一念といふ既に凡夫思慮の起らざる間に發起したる信なれば相對絶對共に言を亡し是非得失兩ながら慮を絶す是を心性の融通無礙といふ此心ハ如來選擇の願心より發起する信心なり大聖矜哀の善巧より開闡する真心なれば凡慮の塵を拂ふて淨く澄たる無二亦無三の一心かり其妙相をハ凡夫思想の上によつて二種深信として明し玉ふ然れば凡夫着相の思ひの上に二種の信相ありと雖も着相の二種深信にあらず即ち彌陀願力の二種の信相なれば着相の二種ハ倒るゝとして願力の二種ハ混ざるまとなし其譯ハ性体乃深心の妙相が機法の二種の上に顯はれたる信相なるがゆへこの信相が爲に凡夫着相の二種ハ破られて機法次第の信相の儘が他力至極の金剛心となるか如是の譯ある二種の信相をハ氏は着相の見を離れしめて而も二種ハ深信ハ常に次第差別と語りても誤りなきやと尋ぬ是れ亦許さざる處なり能々思念あるべし

悟助問云本願力乃上も二種次第の信相なま又凡夫着相の處も二種次第の差別なり故に次第差別を常格として二種深信は辨じて可なるやと問ひたりとを許さざる處なりとは其意を聞ん

信平答云願力の二種と着相の二種と信相一ならざる異なる願力の信相を迷情着相の二種を以て扱ふべからざる信心に淨と不淨との別ある故に今も許さざるといふ悟助問云信心に淨不淨ありと雖も願力の上も着相の上も共に二種なれば次第差別を常格として辨ぜざるも言葉の上には失は有まじと存するなり

信平答云信心に淨不淨ありと雖もとて淨と不淨との言と義とを奪ふて失はざるべしとハ疎畧の意といふべし其譯ハ清淨の信心ハ報土の眞因なり不清淨の信心は迷界を出離せざるに兩邊共よ二種といふ一往の言葉ヲ執して佛因と非佛因とを荒涼に過言と玉ふこと勿れと申すなり

悟助問云佛因と非佛因とを荒涼に過言すべからざるをハ之を聞き別に尋ねん

よ清淨の信心も願力成就の二種乃次第なりとして而も一深心れ妙相と差別の  
機法に蒙らるめたりといわハ此二種の信相が直に一深心の妙相にして別なる  
ものにあらざれば一深心の妙相といふが常に二種深信乃相にして一深心ハ一  
念よ領解するといへるハ唯言葉ばかりにして實は次第よ領解するまど、な  
るよあらざや

信平答云二種深信ハ一深心れ妙相と機法の上に蒙らせて而も凡夫着相乃情の上  
に顯すと云もの、是れ善導大師乃私どとにあらざ願力自ら然らるむ二種ハ  
信相なり故に二種深信といふは機の方を信まると法の方を信まると信乃相を  
示せるものにして凡情着相の二相は倒る、とも願力成就の二相は歴然として  
威徳の相を現じつ、機法を信する人にあるの信相なや又一深心といふは此二  
種深心れ鉢性にして願力の働きよ付て機法の分極を信まるといふ二種乃信相  
にあらざ既に一深心といふと二種深信の体性なりといひ二種深信は其体性を

本願力を以て機法の上よ顯して本願を信する人の信相なりといふ即ち性と相  
との別あり混淆すべからざ抑一心性鉢の妙相とは森羅萬像歴然として動かざ  
る相なり二種深信といふと一深心の妙相中に機法分極乃肝要をぬきとり願力  
を以てこれを成就し而も本願を信する人の上よ一深心の性体を獲得せしむる  
爲に差別機法の處に蒙らせて二種の機法を信する時一深心を獲得すその獲得  
相を明示する二種の深信なり是故に上より一深心乃妙相を辨まるとても心得  
なくして唯融通無礙の語を以て常格とて平一面の辨をなすべからざ先  
よ娑婆縁起と淨土縁起との別ありと申せし所以なり又二種深信を辨まるとも  
次第差別の語を以て常格として辨すべからざ是れ凡夫着相の二種を離れ我を  
忘れて機法一体といふ法爾の法義よ達する譯ある二種の信相なるが故には  
申せしなりとれば一深心といふ一も又二種深信といふ二も共に着相の數を離  
れて法爾法門中ハ一二にして謂ゆる聖者乃數の名なるものなり

悟助問云一深心性体妙相は森羅萬像條然たる妙相といひ二種深信の信相は法爾法義に達する願力成就の信相といふ即ち法性眞如海の妙波瀾といふが如き訓話おれはまれ定めて予を引て着相の境界を離れしむる氏が巧化ならんとは密に察すると雖も眞如一貫の信心海渺茫として却て詞淵に迷ふ願くは易く着相を離れて他力至極の金剛心に達せんとする望を引て訓話を蒙りたし  
信平答云氏がいふ處れごとく予も存せざるよはあらねども問答の理を追ふて今乃点にまで進みしなり然しよくく察すれば道理の高尙より又平卑に降る其進退あるが如きと其實は我着相の情のみよして覺はこれ平等覺あり悲はは無縁大慈悲なり進退尊卑智愚善惡の差別あるまともし然りと雖も暫く氏が乞ふ處に隨ひて平話に歸り凡夫着相の思慮を亡する二種深信の相を示さん先づ凡夫發起の三心より如來利他の信心に通入すべき旨を教へ置き玉ふ聖訓の意を窺ひ廢立の趣を述んとす然れども善導大師二種ありとの玉ひたる二種の上

を直に押へて愚禿鈔には他力至極の金剛心一乘無上の眞實信海との玉へは此上にて凡夫發起の心より利他の信心を通入する訓話をかすまと能はる然れば同鈔よ今の二種深信の外又文乃意を案するにと仰せられて七種の深信の數を以て示し玉ふまとあれは其御意に付て示さん第一の信機は自身を信する自利の信心なりといひ第二の深信は乘彼願力を信する利他の信海といひ第三の深信は觀經を信するといひ第四乃深信は彌陀經を信するといひ第五の深信は唯佛語を信じて決定して行に依るといひ第六の深信は此經に依て深信すといひ第七の深信は深心の深信は決定して自心を建立せよとの玉へり然れハ七深信といふ列よ連る自身を信する深信又乘彼願力を信する深信は自利の信心なり利他の信心なりと差別するあれは善導大師みづから深信に亦二種ありとの玉ふ元來の二種深信とは其意異にして暫く文れ上にて凡夫着相乃處に立つ二種の相なれハ下の五深信の列よつくがゆへに七深信となると知べし此よ自利利他

の符鳥ゆるハ即ち自力他力の分別ありと知べし第一の自身を信する信ハ自力  
着相の信なれハ當人みづから罪過を信じて歎きを帶たる信なり故に法性に具  
せられたる性惡の儘と了る証智なき凡夫乃爲彌陀如來果後の方便より四  
十八願を立て兆載永劫の修行に依て本願を成就し玉ひ而も我無始已來習ひ得  
たる罪惡の此者とは本願力を信する一念に知る々々性具の惡機であると達す  
るよふに方便し玉ひたる大悲本願の譯とは眞實に聞きて而も着相乃分別智  
を起し自身の罪惡を知たるばかりの淺き信なれば自利の信心との玉ふなり第  
二に深信ハ利他乃信海なれども第一の信機淺きが故に其信海を窮ることを知  
る處ハ從者が主人乃富貴を信仰して己が心あての頼としたりが如き思想  
上の信心を起すが故に利他の信海乃深きに達せざ却て己が思想上に認る淺信  
とあるなり如是第一第二乃信心が凡夫着相の知解も落る則ち第三の信も亦淨  
土乃莊嚴或ハ三尊の慈悲れ有様などを願ひ或は九品往生の勝劣などに心を遊

ばして所謂佛法好きよなるなり第四に信ハ彌陀の本願虚しからざることを十  
方諸佛証誠して凡夫得生すべき旨を勸め玉へるを己が勝手に取入れて着相の  
知解に勇を付る淺き信となるなり第五の信は佛願佛教佛語に信順するは眞の  
佛弟子なりといふ信なれども前來の次第に依て後世者佛法者の相を現じ表に  
柔和と本とする道心山子といふ体になるなり第六の信ハ佛の行法は満足大悲  
の行法なれハ我を誤らせ玉ふべからざと信じて佛法にまさへあれハ珍重する  
といふ氣質よなるなり第七の信は自心を建立して己が心得に相應したる行を  
専ら修して別解別行異學異見の人に妨げられざるよふとて手元を力む自力の  
念を凝す信心とあるなり己上七信心と列りたる上にも第二の深信と第五の深  
信よハ利他の符鳥ありと雖も是れ信心ハ鉢性に付てのまゝにして行人の信相に  
置ときと第一深信の誤りよりして七深信通じて失を成ざるなり之を凡夫着相  
の深信の相とはいふなり



悟助問云七深信の義を分別すれハ如何にして凡夫發起の信心より如來利他の信心に通入せらるゝや其譯を詳に承りた

信平答云七深信を順逆に見るとき終ハ他力至極の金剛心ニ通すべ一第一の信心を誤れば第七迄通じて失をとる姿ハ上ニ辨じたり之ハ順見の意なり次に逆見すれば第七自心建立の信といふも忽然として建立したる信にハあらず順次究意する信なれば先づ凡夫の疑難ニ依ては往生乃信心を增長一次に聲聞緣覺及地前の菩薩乃難に依て清淨の深心を增長一次にハ初地已上十地の菩薩の難に依て上々の信心を増長す次には報佛化佛の難に依て畢竟して一念疑退の心を發せざとありて如是の難に當てて建立し窮めたれば義意を忽ち眞實の二種深信ニ歸す然れども既に文意を案じ玉ふ七深信なれば逆見して通入の義を審にすべ

悟助問云逆見して審になる義を承りた

信平答云第七深信の意も満足大悲の佛行を信せればこそ建立するを得たるなれば是を信せれば第六の信なり此行を信せると佛願佛教佛語ありて行も信せらるゝなり之を信せると第五の信なり此信乃起ると彌陀乃本願ハ十方諸佛異口同音よいて證誠一玉へハ凡夫往生を得ると彌陀釋迦諸佛同意れ上かれは恆沙乃佛も証誠一玉へると信せるとは第四の信なり此信の發るまとい西方に但受諸樂乃淨土ありて得生すれハ其淨土に至ると信する第三の信なり此信の發るは其本阿彌陀佛ハ本願力成就の報土よいて此佛乃願力も乘せれば必ま往生することを得ると深信せるとは第二の信なり此第二の深信ニ決定を得れハ即ち如來利他の信心なり七

悟助問云順見のときハ第一深信より第七深信迄順通す然るに逆見のときハ第一と第二迄ハ還ると雖も第一にハ還らざ但し逆次乃人には第一の信機ハ不用と

信平答云逆次に還るときハ第二の乘彼願力の深信ハ利他々力の信海なれば此深信が爲には着相執を帶たる第一の信機は最も不用なり

悟助問云上に深信に二種ありとしてゆれハ信機なくして信法に達することは得べからざるなり宗祖も機法二種を押しへ他力至極の金剛心と結成一玉ふ然れハ氏が今の意如何と存ぞ

信平答云汝何ぞ理の通ぞざるや七深信といふ處にては順逆も掛り自利々他の判も置る、と雖も亦有二種とある二種深信の處にハ凡夫の着相なきが故に順逆二見も自利々他の判も下すまとは出來ざるなり大鉢此深信は法界の實印の如き一心を領解せしむる爲に性具の機法をハ知ざして迷ひぬる凡夫は執情をハ佛の大悲より見込めて本願を發して修惡を性得と誤りたる凡夫に應じ修得乃善法を成就して機と法も共よ修得の事實と一機といへハ極惡最下の機なり法といへば極善最上の法なりと機法を差別して其所詮一深心を得せしむる爲の

二種深信なれば全鉢願海より起り來てある二種深信あり故に前信なくハ後信もなし後信立ざるときハ前信も立つまとなし然るに氏ハ着相を覆ふて二種深信中に信機は不用かといふ過てると謂べし必だ々々二種といふとたの深信と七種といふときとの深信とを窺ふ義脈を取違ふべからざ

悟助問云氏がいふところ乃性惡修惡性善修善かど、ハ如何なる義なるや予も其等の義を知らハ法義に於て過つまも亦少なからん願くは辨じ玉へ

信平答云善惡は車の兩輪乃如く又鳥乃兩翼の如し故に惡を斷じ盡すときは善も亦あることあり又善を斷滅するときは惡も亦あるまとなし然るに着縛の凡夫の爲に大悲を以て四十八願を發し凡夫の修惡を性惡として修得の善法を成就玉ふこれを願成就の法といぬ又凡夫は善を性具にして修得の惡人となりたり從本來機法ハ鉢一の性よして改まるまとなきなり然るを凡夫顛倒して誤て己が修得の惡を認て自性とするが故に彌陀の大悲之を憐みて而も倒執の凡夫を

捨玉ハ老却て倒執ハ應じて法藏比丘と降り終に修得の佛となれり凡夫ハ善と性具とて修得の惡人となれりと雖も若一性を談老れハ一切衆生悉有佛性といひ若一佛といハ生佛不二にして而も成道せる佛なりと談老と知べし

悟助問云今の序を追て修と性との義を能く々々承りたし

信平答云修といふハ修治造作といふまゝにておさめ々々なすといふ義なれを事理で云ハは事の方なり次に性といふは本然として改まらざる義なれを理乃方なり又体と用と、見れば修は用なり性は体なり又眞俗と見れば修は俗なり性は眞なり又不變隨縁と見れば修は隨縁なり性は不變なり又依他起性圓成實性と見れば依他起性は修なり圓成實性は性なり其名は色々に異るれども義ハ皆同じものなり既し性とといふ是を心法といハ未だ念れ起らざる先に起すべき性あるといふなす修といふは正しく念の起りたるといふなり又色法といハ諸の法の生し顯れざる時に生じ顯るべき性あるといふなす修といふは色々の法が起り顯たるなりされは心を起ら老色も生ぜざる時の性体乃處を性とといふなり又修といふは右の性體が因縁によりて假りよ起りたるを若迷れ眼より見れば起り顯はれざる先の性とハ別に變りたるものと見るなり又悟乃眼より見れば起り顯はるものなれども全く起らぬ先の性と知るなり譬ハ水と波とれ如く氷と水との如く水の外乃波にあら老水の外の氷にあら老風と寒との因縁によりて氷とも波とも顯れたるなり又石の中木の如く打出し揉み出しすれハ纒の光り生じ後にハ千草万木とも焼なり然れども石中木の中にあるときハ何乃災ひもなしこれ同じ物が縁に依て分れたり分れたるものが其本一体にて分れぬものなりと知るを修性の義と心得るといふなり

悟助問云修性といふこと一往其意を聞きたりされハ此修性を深心と二種深信と

二六 信月 一〇 文  
よ掛けて再往親しき示諭を承たし

信平答云氏が着相ハ兎角一念刹那ノ領解を執るが故に本理を心得る故に延た  
る觀知の上に及して其相を示し次にまれを縮めて深信を談れハ自か修性の  
義も心得玉ふならん先づ申さハ穢土を厭ひ淨土を欣ひ求る情の起るハこれ體  
なる修惡なりといへハ氏ハ定めて思ふならん厭離穢土欣求淨土の思を體なる  
修惡といえてなるものかといふよふなる心あらハそれか即ち情よ落て法の  
眞理を失ふといふそのかれハよく々々聞玉へ圓覺經よハ種々の取捨はま是  
れ輪回の媒ぞと説けり然れハ己れ極樂へ生れんと思ふも妄念なり救ひ取らせ  
玉へと思ふも妄念なり此妄念妄想ハ性具の惡法が起りたるものなれハ別のも  
のにあらず此修惡の當体が性惡微妙圓融法界の躰なり此故に日々娑婆を厭ひ  
夜々淨土を欣みて盛に取捨すれども實よハ捨もせど取もせざるなり然れども  
稍もすれハ捨ると思ひ取ると思ふは取捨とまになきこと、知る智慧が止ると

取捨の情が起るるかり依て情を起さるして智乃起るよふにするが修行なり  
氏や如是言葉を聞けば左よふなる修行がありては我等が根機に相應せざれば  
こそ他力横超の本願も歸するなれ我等に於てハ用もなき話一のよふと思はる  
、心も起るからん其こそ取もかほさる妄念妄執かれ凡夫ハ迷ひ深く智慧あき  
らかならぬゆへ堅固第一の妄想と名づくるかり氏が身も妄想の固まりよして  
虛妄不實なること鏡中の影の如く實躰なきものなれどと執情かたまりて更に  
融せど然れは性惡微妙不可思議圓融の境界より氏が如き身を縁として性惡が  
現起して法藏薩埵と顯れ四十八願を發し氏が修惡を兆載永劫に修し治めて性  
惡微妙不可思議の法を成し玉ふ之を機法一体の南無阿彌陀佛と申すなり然れ  
ハ南無阿彌陀佛と申す妙体は是非邪正の見も現せず智愚善惡の情もか誠に  
機法一体の妙德圓融至徳也嘉号なり然るに我等如是の義如是の徳も歸するこ  
とを知らる我等若し是を知るときハ不可稱不可説不可思議の功德ハ行者の身に

満るなり此至徳を行者の身に持つを深心と教へ玉へり氏や怪むこと勿れ機法  
一体の深心とは此謂ひなり然れども至愚の者に於てハ此妙旨に達しがたへ故  
に堅固第一の妄想と名づけられたる凡夫ハ妄想を固まり不實虚假にして實跡  
なきも乃と雖も凡夫が實と執する情に對して暫く法ハ性惡まで斷じたる法の  
如く成じて極惡最下乃機極善最上の法と向對して修得の惡機と修得の善法と  
差別一機法共に性得れ善惡が因縁より依て顯現して修得とかりたる上に付て待  
對したる機法なり此機法に深信といふ信を蒙らむるとき信も亦二種となま  
て修惡の罪人は無有出離之縁と信知す此機は向對したる法ハ本よま修性不二  
の法なれハ修得の善法よ法爾として信機れ者を引きて信法せしむる徳あるが  
故よ修得の惡忍も性得微妙乃性体と轉ざる處を信機信法の二種深信といふ  
なま此意を上より辨へ來るとあるなり氏や怪むこと勿れ昔より一昧二相の  
深心といふハ深心ハ信体なり二種深信ハ信相なま今此義を明細に辨す

悟助問云上來の細辨にて一深心と二種深信と乃義を一往了知すと雖も尙不審の  
存するあり乃ち機法に蒙らむる深信の信の字ハ諸家通じてタノムと訓る今  
機法を差別して機に蒙らむる信も亦タノムといふ訓を施して可なるや  
信平答云信といふハ心を用にして善法に付くハ決したるまとなり故にタノムと  
いふ訓ハ其ときよ施すなり然ながら至極大乘の上には一概すべからま涅槃經  
には惡を信せると説けり今も惡機を信せるといへり然るに信の字を解するこ  
と俱舍の光の記に信に二種あり一に忍許の相或は信可と名く二に欲樂の相或  
は信樂と名け或ハ信愛と名く名異にして義同一と又百法論疏に如何なるハ信  
と名く實徳能のうへに深忍樂欲して心淨なるを性とす不信を對治して善を樂  
ふと業とすと唯識論にハ忍ハ謂く勝解これ信乃因なり樂欲ハ謂く信の果なり  
と然れハ信に二義あるまとい諸論を明す處を故に惡を信する信ハ忍許の義  
あり善法を信する信ハ愛樂の義なり既よ信は心の澄淨なるを義とするが故に

機を信ぜるときは、愁歎希望などの濁り盡はて、心澄淨なり法を信ぜれば愛すべき法を愛樂して心澄淨なり此中タノムと訓る信法の方の信に施すべし今機法を差別したる當相にては信機乃信ハ忍許せ義なり即ち信知乃名かり信法の信は欲樂の義なりタノムの訓を施すべし

悟助問云信心を教へ玉ふ言葉に阿彌陀如來を深くたのみとも又御袖にすがりまいらせてとも又佛にまかせまいらせてとも又仰せにまたがひとも御言葉ハ數々ありされども同じく一心を勤むることなれば其意全く一なるや

信平答云御一代聞書に彌陀をたのみハ南無阿彌陀佛の主にかゝり主よなるといふは信心を得るがまとなり又前々住上人より御相續せ義は別義なきなり唯彌陀をたのみ一念の義より外ハ別義なく候これより外は御存じなく候如何よふの御誓言もあつべきよし仰せられ候又凡夫往生ハ唯たのみ一念にて佛よならぬことあらは如何よふの御誓言も仰せらるべき証據は南無阿彌陀佛なり十

方の諸佛証人にて候とあり案老るに是等の文は安心を示し玉ふ要文なり故に肝要なる一念信を示し玉ふときはたのみといふ語を用ひ玉ふまとは諸聖教よ心を付て見るべし世間普通よ云ふタノムも又シタガフも又スガルも又マカセルも皆一意なりと是等の不調べは説教者の愚婦を諷すときに云ふなり今問に應じて辨明すれば凡そシタガフ又マカス又スガルなどの語は他力信心といふ義を顯すと本とする語にて唯信佛語の深信の中に三隨順ありこれ順信の位にして眞宗本典行卷に夫れ菩薩の佛に歸するまとは孝子の父母よ歸し忠臣の君后よ歸し動靜己よあらま出沒必ま由るが如し恩を知て徳を報る理宜しく啓すべしとある意にて如來を無上法王として菩薩を法臣とするといふ眞佛弟子の願へを父母君后よ仕へる義も取れるなり第五の深信に利他といふ肩註もあり自力よあらざるを明白なれども正しく二種深信を示して行人の信相を的示する語にはあらす二種深信を的示する相手は眞佛弟子よあらま疑心自

力の計ひある不定心の人なり此人に實語を傳へて口授一佛智をばらばして決得せしむる善知識の能を顯すことなればタノムといふ語を以て一流の他力眞實の信を決定する旨を相承一玉へるを前に擧る三文を以て指南と知べし能々心得玉へ

悟助問云機法差別乃當分れ機の方の信は忍許の義にしてタノムといふ訓をなすべからば法の方の信は愛樂の義にしてタノムの訓を施すべし又タノムの語は信決得を勸むる相承の語なるまとも具に承りたり然るに機法一体と機法差別とは上より數々出るとあるが其中法界々中にして本理と極むるときハ機法一体が本理なるや機法差別が本理なるや公然たる本理と稱する本体を聞んと存するなり宜しく辨一玉へ

信平答云是迄の話とすら廣博といひ高尚と唱へし氏が今の問ふ所は廣くして猶高し然りと雖も間に應じて辨まべし機法一体といふも着相の見を以て鉢理と

のみ決せハ猶これ凡夫乃知識より強るまことに忽ち理と智と互ひに離れて未盡の失を起さん若然らハ法界もあらま一体にもあらざるなり法界ハ即是圓融無作乃第一義空なりと指南もありて空假中の中道の義かり然れハ法界公然の本理といふハ機法一体の中道義かり若この本理といふを着相すれハ忽ち智と離る何ぞ中道の本理と稱せん中道ハ機法一鉢理智不二かり此中道の相と了ぜんと欲せハ必ず眞諦の一切智といふ實智と又俗諦の道種智といふ權智と此二智と了まれば中道の一切種智といふ本理と了まべし往生論註ハ智慧慈悲方便三種の門般若を攝す般若ハ方便を攝す應よ知べし般若ハ如よ達する惠の名かり方便ハ權よ通ざる智の稱なり如よ達すれハ心行寂滅なり權に通すれハ備に衆機を省る機を省るの智ハ備に應じて而も無知なり寂滅の惠ハ又無知にして而も備に省る然れハ則ち智慧と方便と相縁して而も動じ相縁じて而も靜なり動よ靜を失せざるハ智慧の功かり靜よ動を廢せざるハ方便の力なりと云

へり然れハ動と靜とハ眞と俗となり動に靜を失せ老靜に動を廢せざる動靜一  
体の活用あるを一切種智の中道と稱す凡そ三諦の扱ひよ七重あり其中よ單眞  
單俗と複俗單眞と複眞單俗との三種は諸聖教に扱ひありて今の註論の上も般  
若と方便と互攝する旨を示せる文は單眞單俗なり其方便と云へる單の語の中  
に智慧と慈悲と方便との三門あり般若は義翻して妙恵と云即ち實智なり方便  
とハ溫和にして即ち權智なり此權實二智の所に眞証を顯して二乘の見に落ち  
老顛倒に沈みて凡夫に降らざるは中道の本理なり其相を見るとを得るとは  
智慧慈悲方便ハ三種の門ありて無相と相と無相と動に靜を失せ老靜に  
動を廢せざる大菩薩の活用となる此意より般若を攝したる智慧と慈悲と方便  
との三種門中に單と複とを掛て論究すれば眞俗不二機法一体といふ第一義諦  
を顯すなぞ即無量壽は是安樂淨土ノ如來ノ別号とある南無阿彌陀佛なり然れ  
ハ機法一体乃法といふも南無阿彌陀佛機法一体の機といふも南無阿彌陀佛此

六字は誠に絶對不二乃機法なり然れども機法一體ハ法といへる復眞單俗機法  
一体の機といへば複俗單眞なぞ此單複の名義に依て論究するとき眞俗不二機  
法一体といふ中道無疑の深心が現じ此深心を會得せしめん爲に機法を分つと  
きは權に通じて衆機を省る義にして單俗複眞の義となり凡そ單といひ複とい  
ふ義の掛るときハ其智ハ權智なり又掛らぬときは其智ハ實智なりされは衆生  
の迷を止めん爲に本願を發じ玉へるは複眞の佛單俗の衆生を照し玉ふが故な  
り是權智より起りて動に靜を失せざる智慧ハ功なり終に衆生の信心を成就し  
て思慮一念の功をから老盛んに往生を得せしめ玉ふハ靜に動を廢せざる方便  
の力なり故に今二種深信とある義は權智より起りたる法門なれば既に衆機を  
省て聖人よまは凡夫々々の中にては善人よりは悪人々々の中にハ男子々々よ  
りハ女人と選び下りて大悲方便ハ權智より攝受衆生の法を成就し玉ふ此權實  
二智とは喩へハ親の思ひに設ひ十人の子ありとも他人の子ハ一人も居老皆是



れ我子なりと承知し居るは實智れ如し又末子或ハ片輪れ子を別して不便に思ふは權智の如し如是別して憐れむ佛乃權智が我等が處に運轉して顯現したるが信機信法の相おれハ他力の信心といふ義を成る又一貫の法は極惡の機も諸上善人も一味に甘じ十方諸佛を皆共に讚歎し玉ふ故に一實の法ハ實智乃知しめず處なま此旨に達したるを一の深心と云ふ所謂二智圓滿同平等攝化隨緣不思議なりとある不思議の攝化に値ひたる信心なれハ權實二智具足するが故に權智乃法義より他力至極の金剛心と結成し實智の法義より一乘無上の眞實信海と結成し玉へり然れハ二智乃扱ひより聖道と淨土との法義が出生して先づ淨土門にては實智を權智と融じ取て而も差別門にすハリ九方に揀んで西方を勸め惡機を本として攝取を垂る、差別の上に建立せるものなり又聖道門にていへハ權智を實智に融じ取て而も融通門にすハリ心佛及衆生是三無差別と談じて娑婆即寂光の成佛を立る無差別れ上よて建立せるものなり今此意より二

種深信の旨を窺へハ信法の信をば信機の信に融ぜしめて而も下乃機と法とをながむれば選擇攝取れ法門となりて信心は西方往生乃正因といふ淨土門の義とかなり又信機れ信をば信法の信に融ぜしめて而も下乃機法をながむれば煩惱菩提体無二といふ融通無碍の法義となれハ信心ハ大菩提心といふ義を成じて涅槃の眞因といふ一切佛門を都會して融るる法義を顯す故に二種深信結成の二句ハ全く此意なり如是法義無盡の湧き功德無量なるハたゞ信心を本とす華嚴經に信爲道元功德母と説けるをハ信卷信樂釋中全引して眞實信心を証明し玉ふを見るべし

悟助問云質問に應じ解示する、ところ其理幽邃にして予が心中に落ちかね明かに信を懐き難し普通に聞所ハ佛ハ本願を成じて必ち攝取し玉ふが故に衆生ハ唯勅命に信順してさへあれハ他力の領解ぞと教へら、を余ハ實に々々と感心して此憂き歲月を送るなり然るも右乃如く六ヶ敷こと、かりてハ合点のゆく

ためないかと存じますれば只易きを本として平ら信じの出来るよふに御話を承はりたり

信平答云成程氏がいふ道理もありて六ヶ敷まとい分らぬと申せども一途に承知し難し予ハ十二三歳の頃より後生のみとが氣に掛り種々知識を追ふて聽聞いたし又聖教の指南も授りなど致したれども所謂堅固第一乃妄想にて中々出離の用意となるべき信心を貯へ難く既ニ廿三四歳の頃ハ神經の大病となせ晝夜を忘れて後生の趣を哀み歎く折柄なれば三衣と聖教とを力として鬼卒の手をも遁んとする程の妄情に逼られたり然るも口傳鈔の凡夫往生の事とある章を熟讀するとき妄眼の所見實と執るにはあらずれども恍然として宗祖の示現し玉へるを拜し奉り尊容といひ眞教といひ毎年の疑塊一時に去り破暗滿願とある聖訓も身に覺へられたり此歳を始として宗教の盛衰を考る大志を發し報恩の志を抽んづるに付ては一流の本源を究んとて御依用乃聖教寫得し奉る

其中に日本にして念佛往生の大祖たるは源信和尚と認め御作の往生要集を寫得し奉り教義教相を窺ふに廣くは一代に涉り中ハ二十餘經狭くハ淨土三部妙典極畧すれば阿彌陀經一卷と決し念佛の義を研磨すること數年し涉り一心三觀一念三千の妙旨廣大なりと雖も彌陀念佛乃信心に融攝し玉へる深奥を知るとを得たり爾後彼此の教義を究んと欲して本年まで殆四十五年ばかりにかりぬれども實に理も決定なき議論の六ヶ敷にも大に困りたり然れども思ひ直しては聞き思ひ直しては聞く中に歲月も立ゆき今日の分野に迫りたり然るも理なきまとの分らぬは道理よこそあれ能々聽けハ分るまとの六ヶ敷きとして其易きを聞んとは根の盡たるにもあらで己が我儘といふものなりそれ我儘を經に取て己が合点のゆかぬこととて己が一切分らぬといふは實に道理もなきことなり凡そ分るまとの分らぬハ己が愚にて過去の因縁とこの世の無學とれなすまとなれば自ら慙愧する々々聞けば本眞分るまとなれば漸々よ

分るものなり其が樂ことなせて今は晝夜も隔てど唯分ることを聞たく存せり  
 なり殊に出離乃一大事に決定心を取ことなれハ氏も執情を拂ひ辛抱して聞玉  
 へ氏が爲に語らん既に氏は勅命を順せざるを信心との心得申と述らる、こと  
 も大に訝しきことなす其譯ハ勅命といへハとして歸命勅命あり欲生勅命あり又  
 回向心中西岸上の勅命ありこの三乃勅命に主義となることあれも唯大様に勅  
 命に順ふのみを信心と申さる、ハ聞分け難く夫歸命を勅命と釋し玉ふハ請佛  
 稱名を標して大行を明し玉ふ行卷の中にして彌陀佛ハ本願の意ハ往生乃行に  
 ハ諸れ雜行を捨て、始來の誓約し玉へる阿彌陀佛即是其行といへる行を修す  
 べし此行は是選擇本願乃行なり既に發願回向といふハ此行を衆生に回向せ  
 んと思召し玉ふ心よてあれは雜行雜善の自力乃行法を捨て、一心に他力選  
 擇の行に取せよと命じ玉へる勅命なれば詮せざる處衆生往生の覺悟ハ唯他力の  
 御計ひに順託するよありといふ意なり故に勅命の位といへは衆生往生の爲よ

え十方諸佛をして勸証せしむる本願ハ行に歸命せよと思召す御意を諸佛の處  
 よあらはし玉ふ譯なれば眞實行の願の當位にて本願招喚の勅命と釋し玉ふ意  
 されは雜行を捨て、正行に歸する二行廢立の際に懸る勅命なり此勅命に信順  
 する相ハ諸經禮讚儀乃信知自身是具足煩惱凡夫善根薄少流轉三界不出火宅今  
 信知彌陀本弘誓願及稱名号下至十聲聞等定得往生及至一念無有疑心故名深心  
 とある相に於て他方攝生の至趣を盡せる此至趣よシタガフともスガルともマ  
 カスルとも云ふとあり文に付て語るは他日に譲る 次に欲生を勅命と語り玉  
 ぬは信卷の中なり此卷は至信心樂の願を標して即得往生の正因を示し玉へり  
 是れ凡夫直入乃眞心を決定する旨を知らしめ玉へる卷よして昔ハ圓光大師の  
 坐下にて諸弟子共に雜行を捨て、念佛に歸し玉ふとハ雖も報土得生の正因を  
 貯へたることハ自他共に知り難くして信と行との坐も分れたるなり故に他力  
 念佛よ歸順すると雖も其心乃是非を論じて而も是なる決定信心乃趣きを示せ

る欲生勅命の意なれハ信卷に次言欲生者則是如來招喚諸有群生之勅命即以眞實信樂爲欲生體也との玉ふ又銘文にハ欲生我國といふハ他力の至心信樂を以て安樂淨土に生れんと思へとなりとも仰せられたり御文にハ阿彌陀如來乃仰せられけるよふハ末代ハ凡夫罪業ハ我等たらんも乃罪ハいかほど深くとも我を一心よたのまん衆生をハ必ず教ふべしと仰せられたりと示せし是行人に決定信心を命じ玉ふ勅命なり

悟助問云他方の至心信樂といふは如何よふなるまとなや

信平答云我等凡夫ハ眞實の心も清淨の心もなきがゆへに佛の誓願を至心信樂すること能えざされハ己が不實不淨の心は其まゝにさしときて彌陀が誓ひたる至心信樂を己が物と取て彌陀が國へ生れんと思ふて見よ生るゝ心にならるゝと他力の至心信樂を命じ玉ふ勅命なり喩へハ偶まの宿入に下女が親里へ見舞はんとするとき己が鏡を開けども錆び曇りて少くも見へ難きに奥様の命を聞

けは我鏡臺乃鏡を用ひて見よとあるが如く此時下女直よ其命に依り右の鏡を取て己が面を見れば心までも澄きたりて己が鏡は用ひざるに早故郷に歸る心地せらるゝ如く如來の直命を聞て他力の至心信樂を取て見れば心も澄きたりて淨土よ生れらるゝと思はるゝ信心を命じ玉ふ故に勅命の聞き心澄きたるときを信乃一念と申すかり此一念即一心なり此一心即深心なり此深心即深信なり此深信即機と法とに澄きたりたるを信機信法の信心といふ偕此一心一念なる刹那にハ機法共よ圓現すれども機の念相よ涉らざれを往生を思ひ定るといふ思なき喩へはオカルが鏡には由良之助が披きたる書狀は前文も用事も同時に寫したれども其趣きを合点するには次第を追て讀むときに合点するなりそれ如く一心一念の處よ生と佛と同時よ現じて衆生ハ佛に向ひ奉りて今度ハ一大事の後生御助け候へとたのむ謂れあり此とき佛の方よりは其機を光明の中に攝めて往生治定せしめ玉ふ謂れあり一念のときにいたのむも助くること

共に意業に涉らざれば極悪の衆生を攝取し玉へる本願成就の歴然たるも謂れ  
とまてあり此歴然たる決定信心の誠なるをハ中興上人は念持の義を以て行  
者乃念相に動き現れたる顯露の處に付て教を起し我身ハ悪きいたづらものな  
りと深く思ひつめて其上に思ふべきよふハかゝる機を本と助け玉へる不思議  
の本願力なりと深く信じ奉りて少も疑心なけれハ彌陀ハ必老撮取し玉ふべ  
と教へ玉へり又彌陀をたのめと教ゆる人ハ阿彌陀如來も阿彌陀如來の我を  
たのめと仰せられたりとも玉ひて一心一念乃ときの有様を念相の處も及ぼ  
して教へ玉ふ然れハ我等彌陀をたのむといふハ彌陀も教へられたのむなり  
若しよのたれむは自力あり杯と訝る人あらハ如何なるたのむが他力のたのむ  
なるや却て訝しきことあり都て未了解の人は初めは五根五識の情も留めて其  
留めたる佛意を第六乃意識の了別に引込し思想決定の處よりたのむといふ義  
を成せると臆度する歟若し然らばたのむといふハ全く意業となるなり正義者

の立る處ハ然らば一心一念の本願成就の有様に信達したる機法の信心の相と  
念持の處も及ぼして教へ玉へる中興の中興たる所以なりと心得るがゆへに訝  
ること更になし然るに之を訝る人ハたのむの語を會得し兼るがゆへにシタガ  
フ又スガル又マカスル杯との語を雇ひ來て種々工夫をめぐらす然るに其本と  
する一首の歌あり歌云くタノムトハ聲モ姿タモナカリケリスガル思ヒチタ  
ノムトハイフと此歌をハ私情を用ゐ解してスガルモタノムも全同一意なると  
いふ是文盲といはざるを得る今解すれば御文ハ阿彌陀如來に向ひ奉りて後生  
助け玉へと申さんものとは必老救ひ玉ふべ一等とあるとは三業異解者誤りて  
向ひ奉るは身業なり助け玉へとハ意業なり申すとは口業なりと解したり右の  
歌は之を破するものにして最初のタノムトハとの五字は即ち兩人の訝ふ所の  
御文のたのむの御言葉にして正義者今發端の語とせり聲モとは異解者の口業  
の陳るとまろかり姿モとは異解者の身業の調へなり此身口乃二業を正義者よ

り破してナカリケリと斥く其意ハ汝ハ御文のタノムとある語を謬解して聲も姿も揃へて意業に助けたまへとたのむ三業に涉りたる安心とすれども御文のたのむと教へ玉ふ安心ハ三業に涉りて教へ玉ふタノムにてはあらまといふこととナカリケリとの五字よて顯すかり故に三業を調へて自力よてたのむことよあらま御文のタノムとは即ち他力の信心を顯し玉ふ語にてこそあらま然るを三業を調へてたのむこと、る杯とは全く自力乃心なりと自力心と他力信心とを簡別して他力信心を顯す爲よスカル思ヒナと語を造りて猶自力他力を簡別して次にタノムトハイフと上に標したる安心御相傳の實語を結成したる歌なま然るを又異解してタノムの語を會得し難き文盲家がタノムもシタガフもスガルも全同一意といぬ証據に取り一流肝要の安心を強談するよ付ては三世に涉りて一度發起する大決定の信心ハ輕忽になりて皆人一往心得面の信心として誠しき信心の趣を教導轉化する人を希なり

悟助問云タノムといふ語を平和み解して會得の出來やすきよ御話下された一信平答云タノムといふは信の字の和訓にして其意を云へは己が心中に疑ひあまて夫にや是にやと一定せざる處に確かなる証誠を得て心澄みとなりて決定を得たるをタノムといふ云ふなり古歌にキカヌマハ春もアラシト思ヒシニケサタノマル、鶯れ聲といへり此意ハ曆書の上は何日より春立つとあれとも若し春かれは鶯乃初音も聞んも乃を左になくして白雪のこ降つしければまだ春にはあらじ杯と春を疑へるその耳へ鶯の一聲にて心の疑ひ忽よはれ誠に春かけりりと決定を得たるをケサタノマル、鶯乃聲と詠じたる歌なりその如く十劫の昔我等が往生を成就し玉ふとはきけとも己が身には引はへて煩惱の起るを思へハ己が往生は成就し玉はざるや杯と心中に密かに疑ひ歎く思ひあるよたのため教ふ乃仰せを聞き疑念速に晴れ心澄みとなり決定往生の信心發りたるをた乃むとそいふなり故にたのむれ語を信の和訓なり信卷に眞實の信樂を以て欲生の

体とすとあてて此たのむといふ信は欲生の体となりてある信樂のことなま故  
 よ欲生勅命の体とたまへる信樂を己が身の上よ須ひ持ちたるがた乃むなり  
 隙へは鐘ハ何と音したるやと問へハ答へてゴンと鳴れりとハ鐘の躰にそなへ  
 たる聲を須ひ持ちて答へたるなま又太鼓ハ何と聲したるやと問へハドンと響  
 けりと答ふるも太鼓の聲を須ひて答へたるなり若鐘鼓にそなへたる音聲を須  
 ひぞして答をさせハ鐘はテン太鼓ハチ、ンと鳴れりとも答ふべし然し左様  
 ハ答へられぬ設ひテンチ、ンと答ふるとも己が工夫を須ひて計ハざれば答へ  
 られぬなり誰も己が計ひなく鐘鼓の聲を答ふるゆへにこそゴンと答へドンと  
 答ふるなれ今も勅命の躰となりたる信樂を私なく須ゆるが故にたのむ決定心  
 の答が出来るなり然れば順彼佛願故の順を以て語ると信受本願乃信を以て語  
 るとは歸命勅命と欲生勅命とを差別あり元祖の教旨ハ順の一字に歸し宗祖の  
 教旨は信乃一字に歸するなり三業安心對治のときは疑情を拂ふと自力を廢す

とありて大悲乃勅命に信順すると裁断玉へるなり

悟助問云回向發願心中西岸上の勅命とハ如何なることを命じ玉へる勅命をまや  
 信平答云二河ハ譬を解して法義を示すに古來より異解ありて甚た窺ひ難しと雖  
 も大躰回向發願心といぬは願生する行人の決定心中に佛の回向し玉へる願を  
 須ひて己が願を須ひぞ他力願を以て得生の思ひをなす義なり文よ一切往生人  
 等よ白す今更ま行者乃爲に一の譬隙を設けて信心を守護するとの玉へハ一度  
 ひ信心を發起したる後なるまとい言を俟ざるとあるなりと雖も異解あるが爲  
 に略して文意を示す委くハ疏を見るべし今文意を示さば人西に向ひて百千里  
 を行んとするに忽然として中路に水火二河を見る夢の中間に廣さ四五寸ばかり  
 の白道あり白道の長さ東岸より西岸に至るに百歩その道水火の爲よおかし  
 れて槌に見ること叶はま此人更ま頼みとする人なく剩へ惡人猛獸等此人の唯  
 一人なるを見て來りて之を書せんとなす此人怖れて直に走りて西に向ふに忽然

として大河の有様を見るに自ら念言すらく中間の白道百歩と雖も中々過ぎ難  
く東へ還らんとすれハ群賊悪獸の責來るあり南北へ遁れんとすれハ惡獸毒虫  
の貪る聲あり今日定めて死せんまゝと疑ひなると認て怖るゝこと極りなると異  
解には是迄ハ雜行雜修自力疑心乃邪定不定の人なりと云ひ次に自ら思念すら  
く還るも住るも行も都て死を免れど四五寸にもせよ白道あり之を尋ねて行ん  
と念をなすといふハ宿機發動とて次は東岸より行け死の難かると勸め西岸よ  
り來れ我能く汝を護ると此人東西の遣と喚とを聞て自ら身心に當て決定して  
道を尋て直進疑心を生ぜざと此より弘願眞實の機かりと解す今難じて云  
くこの喩へは信卷に始めより終り迄全引玉へり例するに深心釋中方便は涉  
る文ハ乃至して化土卷に出玉ふ若く異解れ如く見るときは要門も眞門も弘  
願も都て信卷中よあるとすれは眞實信卷を以て眞假混淆乃失あらむに  
らまや如何次は道理を付て難なるに一度も信を得ざる人忽然として白道を見

ることを得るや既し白道は彌陀の願意に喩へ又行者の信心に喩ふるまゝとあり  
何ぞ未信の人の見べき白道ならん又文に付て難なるは信心守護の譬喩なり子  
の産れてこそ守人も入用なれ信なき己前より守護とハ如何なる意なるや若  
人如是解をなすは諸難湧が如けん

悟助問云上の難なること當れり今氏が解する義を聞んと存ま宜しく辨じ玉へ

信平答云此譬喩を解せん正信偈ハ攝取心光常照護己能雖破無明闇貪愛瞋憎  
之雲霧乃至雲霧之下明無闇と示し又煩惱障眼雖不見大悲無倦常照我と示せり  
今乃喩と合せ考るに煩惱妄念を除かざして而も他力の信心を得ると雖も凡夫  
思想乃手元にてハ常覆といひ障眼といへり故に信心は得たりと雖も凡夫の情  
慮に覆はれて時としてハ往生を危ふく思ふも是れ情に惑はざる、故なり然る  
に習ひ性となるといふともあれハ情に任せて佛道の外は走り無慙無愧にして  
却て佛法の妨ともなすこともあらんやと其の拙き有様を證りて信心守護の譬



喩を設けて凡情に任すべからざる旨を示せるなり文中に忽然としてとある熱字二所あれども共々貪瞋の二河の方へ付く直乃字三所あり直に走ると直に來れと直に進むとかり二所は願生の心に付き中は勅命に付く一字一言も加減すべからざるとハ大師自ら誡め玉へり今亦然り忽然とハ思案の外に事ある杯のとき用ゆる言葉なり直に走るとハ前拵へなくして走るといふ意なりされハ凡夫は世間を貪着して或ハ利養の爲に倫常乃憐れも失ひ或は名聞の爲に諍論を致し一生を渡す中には種々の障りも罹るまゝと述べ難し然れども實をいへも信心發得の己後は念々相續して往生を願すべきまゝとなるに凡情としてハ西方に生ざらば今のまゝにあらざれば百千里乃遠きことに認め願往生乃理外に貪瞋を起すを忽然と示し此貪瞋に比すれば願生の心は微少なれば四五寸の白道と示し頼む人もかゝとは善知識のなきを云ふなり是故に盛んに起る貪瞋の中より己に推して往生を願する意あるを直に走ると西に向ふと示し又忽然の字あれど

も佛智を思ひ出す方々あらざ大河の方に付くかま自ら念言すらくとハ己に推して考ふるなま白道狭少とは己の貪瞋己が願生の信心を比すれば狭少と示す故に願生の思ひ慥らならざ然るを無邊の貪瞋より釋して決定して死を免れざると示し群賊惡獸とハ異學異見の人に責られ妻子眷屬等の他一切世間の萬事に責めらるゝと示し自ら思念するを逆縁を縁として情を以て情を責るに煩惱もハ動作あれども佛の願意にハ動作なき理を思念するなり寧ろ此道を尋ねて前に向ふて行ん必ず可度すべしとハ活て何日まで此世に住まん此世貪着の心より如是の難も罹り來るなま變動なき願力の道あり釋迦も彌陀も見捨ハかゝるまじと思ふ心の起るなり此念となす時東の岸も忽に聞く等とハ釋迦の遺教なり西岸上に人ありて喚ぶとは彌陀乃仰せなり即ち是れを二尊の意と示し此御意を信順して水火二河を願して却て凡情の淺間敷を懺悔して往生決定せし深心と明よして疑怯退心をなきなり是れ即ち初め發起したる深心乃中に發願

回向の義あり。如來の回向願と西岸上の勅命として是を須ひて慙愧し歡喜して發起の信心が臨終まで通るよふに相續すべしと守護し玉ふ譬喩なり故に此勅命ハ相續上に語る勅命なり然るよ初起の所に語るが故に遣喚已前ハ要眞の機なりと見込とを誤ちたる異解もあるかり全く相續上信心守護なるが故に信卷に全引し玉へて御一代聞書に仰にとき々懈怠するときは往生すまじきかなど疑ひなげく者あるべし然れども最早彌陀如來を一度びた乃みまいらせて往生決定の後なれハ懈怠多くなることの淺間しやが、懈怠多くなるものなれども御助けは治定なり有難や々々と喜ぶ意を他力大行の催促なると仰せられたる意と今の二河譬とは同意なり

悟助問云眞宗に勸るとあるは信と疑とを決判して疑を廢して信を勸ると宗旨とす然るよ聞書の文には疑ひ歎くとの語あり二河譬には異解者の怪しむ如き文多し東西の遣と喚との下よこそ疑怯退心を生ぜざとハあれ今の義の如くから

は一流の旨と違するが如き意あるハ如何心得てよろしきにや

信平答云一往難の如くあれども信と疑といふ意ハ廣けれハ信疑を廢立すと雖も一概ならん信も廢すべき信あり疑も殘すべき疑ありよく々々心得て難とべし疑を見惑すれば疑躰ゆりて眞智を妨ぐ思惑のところにては唯愚痴乃外に別躰なし今も佛智を妨ぐる疑ハ微塵程も廢せざるはなし又凡情の上よ淨ぶ事相の淨疑ハ全く愚痴の相なり故に上乃如き御釋躰は唯一處二處のこからん信卷よ樂邦文類を引玉ふ中に夫自障莫若愛自障莫若疑但使蔽愛二心了無障礙則淨土一門未始間隔彌陀洪願常自攝持必然之理也とあり又和譜に無上々ハ眞解脱眞解脱は如來なり眞解脱に至りてぞ無愛無疑とはあらはるゝとあり信疑廢立といふと偏執して此等の疑を廢せんとせば世界々中にて信を得るため一更にかゝ眞解脱に至らざれば無愛無疑とはあらはれざるがゆへに然れハ上來の意を能々察すれハ西岸上ハ勅命を一心正念にして直に來れ我能汝を護ると凡情の

上に信心を守護し玉ふ勅命なり欲生勅命は信心を命ざる勅命なり歸命勅命は  
即是其行を命ざる勅命なり六字釋の三義と考へて合せて其意を得べきことな  
り

悟助問云上來の辨解に依て眞宗の行人の心得べき要旨を知りたり猶氏が道元教  
主と名乗る道元の信心を聞ふとを得た然るは我身を顧みれば未だ堂々たる  
信を得る何故に義解と相違するやと遅々として密に心中に歎く所あり之を如  
何せん思召を承りたり

信平答云義解と自督とを混るべからば義解にハ知識を運ぶべし自督は愚痴に  
還るべし柵尾の明惠上人の仰せられけるに去比笠置の解脱上人の臨し玉ひて  
法談の次に語て云く或夜夢にみる事あり秋の夜明に晴たる心地して人數多く  
來る音よて草案の窓を叩き頻りに謁せんことを望む仍て扉を開きて出向ふ異  
類異形乃者其數あり其中にさもあるべき仁と覺しくて雪ハ頭を埋む霜は眉を

覆たる香染の衣乃様なる物を上に着て面貌こと柄此世の人とも覺へぬ様した  
る躰にて進みよりに語りて云く定めて聞及び玉ふならん我ハ是當初何がしと  
云ふ者なり佛法よ於ては行學年積りて深理をも窮めたるよきを存じきされば  
其比は天下に肩を並ぶる輩なかりき是皆世の知るところなま然る大乘の本源  
を窮めん事を先として強ち戒を專にするまとながまき仍て破戒穢戒乃事乃  
み交りき之によりて大乘の深理を窮めたりと雖も人間一生の中にハ解行相應  
せ先破戒の罪の方重たに依て魔道に入れり古より天竺震旦本朝世界々々に  
名を得たる貴僧高僧達此戒力なき人一劫二劫乃至三四劫魔道に落たる類勝て  
計ふべからば此魔道の習ひ落と落ては急度免れ出ること難し我ハ二劫に此業  
を果すべきかり入滅れ後人間の五百餘年よ及べば遙に久しき心地し玉ならん  
去ども其五六百年と百億重流ても猶一劫にも及ぬ可からば况や二劫と過ぐべ  
た末と思ふあぢたを作法なり毘婆尸佛拘留孫佛杯の時此道に落たる僧どもだ

猶行未達にて續ち居たり去ハその深理を悟りて聽て其任に相應してだにあらハハ、難ハあるまじけれどとさる機は佛在世にだも希なる事となり況や滅後の比丘有難じ多くハ甚深乃妙義を悟ると雖も行は成じ難し命ハ終へ易し仍人間一生の中も相應するところなけれハ先破戒無慙の罪も引れて魔道に入なり魔道に入ぬれば速に浮ぶ事なけれハ多劫の間人天に出で衆生利益の方便をも失ひ自身所受の苦患をも教ふことなし是世尊の掟にも叶は老菩薩の願をも失へり去ハ大乘修行の輩戒門を次よする事と勿れ何れも々々々々習勵むべし仍佛の遺教經にも此戒も依て諸の禪定及び滅苦の智慧を生起する事と得是故に比丘當り淨戒を持つべし又云く若し淨戒なけれハ諸善功德も皆生起する事とを得ぞ又云く我滅後に於て當に波羅提木又を尊重し珍敬すべし此則汝等が大師なり若我世に住すとも此に異なることなると説玉へり然るも中古より已來人の機劣しして拙く戒を守らんと疎なり猶さし世に崇敬せられし僧

侶多く此道に入なり我等大乘の甚深第一義を明め志に依て此業を償ひ果てハ佛果を証すべしと雖も多劫の間徒に苦患にのみ沈みて過ぎ行くと偏へに戒力の闕たるに依れり今見ると末世なりと雖も修道の志し深切なる類共あり此謬事を人間も普く知りめたくて此庵室に列參せり後學に傳へ禁め玉ふべしとて是は某彼は何がしといふを聞ふ古皆名を得たりし僧俗達なま今ハ既に佛果にも至りぬらんと思ひし人達の如何にして如是成り玉ひぬらんと不思議に覺へてさて如何なる御苦事ども候と問侍しハ或は異類の者來りて身の肉を食ひ命を奪ふ其苦みに堪えりて絶入て暫くありて生れれ又異類現じて頭目臆腦手足を切取る時もあり或ハ猛火現じて全身を焼く是殺盜淫の果すところなり或は黑白の二鬼現じて鏡の箸を以て舌を抜き或ハ熱鐵輪を飲めて焦れて灰乃如くある時もあり是妄語し又は飲酒非時食の果すとあるなり如此乃苦事一日に三度五度人に隨ひ時に依て様々替るなりといひぬてかき消すよふに失

ぬと見たりき此まと思ふよ是實語なり尤も慎むべきまとなり今ハ戒門廢れ  
果て飲酒を犯さざる法師も希に五辛非時食を斷ざる僧もなき如此不當不善れ  
振舞を以て法理を究めたりと雖も魔道に入なハ人天の益もなく自身の苦をも  
免れ老して多劫の間徒らに送らんまと返す々々も損なるべし如何にしてか古  
のまに戒門を興すべき方便を廻らさんとぞ申され一次に其謂れありとぞ語  
り玉ひにき熟ら案ざるよ智解にハ如是の失も多し先づ自督を専らにして生死  
を出べきまとなり自督れ方にてハ本來の愚を知がゆへに愚にハ智を用る術か  
きものなり然るを愚にして而も智を用るがゆへに必も惑ひを生じ其惑ひたる  
や氏が爲に一譬を設けて之を示さん人あり忽然として都會の藉に入らんとす  
此人田舎に原藉あるを忘れたるなり若智人ならば田舎乃藉を脱し來て加入を  
願ふがゆへよ必も成ざるなり誰か入藉を許さざらん今亦然り我等惡道に籍あ  
るが故に日夜よ惡を造る然るに極樂はた乃しむと聞て參らんと願ひ望む二分

け知分けの智分を起して定聚の藉に入らんとするハ惑へるなれば彌陀の洪慈  
も如何し玉ハん然れども惡道の藉を脱して移らんには何ぞ憐み玉ハざる佛な  
からん故よ己が惑を知て本愚を了せべし又一奇趣ありて都會の人田舎の人よ  
語るに我等ハ氏として都會の藉に入らしめんと欲す氏欲するや否やと或人答  
て加入し玉へと信可すれハ藉を欲する人ハ喜びて田舎乃藉を脱し都の藉に加  
入せしむるに更に本人の造作なすが如く彌陀の勅命といふも我等を正定聚の  
藉に加入せんとて來れと命じ玉ふ我等信樂してたのむ一念の信まことなれば  
佛より惡道の藉を抜き定聚の藉にいれ玉ふ故に自督として別になし唯たのむ決  
定の信一つにて易く定聚の數に入るなり和讃に五濁惡世の我等こそ金剛の信  
心ばかりにてながく生死をすてはて、自然乃淨土に至るなれとあるをハ惠灯  
大師ハ造作なく入藉するとはあら面白や々々と仰せられたる設ひ仕立要よ  
する娘とても嫁する決定の心なきハ如何せん決心の日を期する外ハかた如く

彌陀も金剛堅固の信心の定るときをまち得てぞとあるが如く然れハ自督ハ決定の信心一つなり

悟助問云今はや暗き心底を打ほけて尋ることなるが如是信心決定しぬれハ未信己前よりは少々變るまゝとあるやとも存せらるゝ心もあり余が所存の如く變ることあるならんや

信平答云信心既定すと雖も常覆の雲霧の下なれハ凡情に於てハ變ることな  
し變るまゝとなけれもこそ喜びも増上するなれ昨日に變りかき者も決定信心の  
ときより佛は早定聚の數に入れて諸の上善人と同一の御はからいを成され候  
と存じ諸佛を喜び菩薩も喜び天神地祇も守り玉へるとハ誠に彌陀深重の本願  
力ありてまゝと存じぬるよハ彌陀喜ぶ心ハ絶へぬなり能々心得玉へ鶉衣とい  
ふ書の中に一の奇人ありて釣瓶の車の身を危きにかけて下女下男の手は使は  
れ而も年中は休暇なし眞も腰も損じぬれハ果は風呂の火は焼る奇人は不便

として其儘を床に置き花臺としてければ身も安た床もありて忙しき業もなく下  
部の手を遁れて賓客上人に賞せらる人も工夫を依れも如是も乃も有りて記せ  
り考ふれハ我等もまた此乃如と身も迷界の危きよか外道魔属の手にかゝり  
六道の輪廻も休む日なし今は彌陀の大悲よめぐまれて身は攝取の中に安じ六  
道の輪廻も既に止み外道魔属に替りたる諸佛菩薩諸天善神に守護を蒙ること  
偏に彌陀の大恩なると身心に變りなきまゝ恩を報じ徳を謝する基ひなれば若  
し未信己前に替りたる身となりなハ佛法者後世者氣色を起して世間通途の儀  
にも相應せざる振舞をもなきは却て見眞大師の御流義に背き非僧非俗の宗牀  
には是るゝかり偏へに祖教を守りて信心をハ内心に貯へ世間の仁義を本と  
て念々相續するを末世相應の念佛行者とは申すなり

悟助問云長々御辨を勞せしめ漸く思ひ當りしことハ御文は古歌に云くうれしき  
さびしき一は袖よつゝこけりまよひは身よも餘りぬるかなとして御勸化下され

たるも今は身に覺へられ密に従前の事を思へは名利の爲に宗教を扱ひ種々の色相種々の名字を執じて自損々他の咎道に難し誠に慙愧に堪かたく存せざるなり

信平答云凡そ佛教は正理因縁の義を明かにすると雖も人にして人の上を見る程ハ唯望と長なるのこにして因果の理を知ることなく然るに禽獸虫魚杯の上と見るよ是も因に報ふ果躰なれども其の哀なき様は中々に述難し己も亦因ありて果を得たる人間かりと存せられ喜び實に限りなく然るは猶達難き佛教に逢ひ得難き信を得たること喜の中の喜なり設ひ佛教を修すと雖も眞實に佛教を知る人すくなく金剛般若經の偈に若し色見我以音聲求我是人行邪道不能見如來彼如來妙躰即法身諸佛法躰不可見彼色不能知一切有爲法如夢幻泡影如露亦如電應作如是觀と説ける文に如く色相を認て我を慕り音聲を執て我を求め邪道を行ざるがゆへは自法愛染故毀譽他人法の身にして一生を虚しく

過る人のみ多し惠灯大師も當山の念佛者の風情をみよぶに誠にとて他力の安心決定せしめたる分なりとて歎た玉ふこと實に察し奉つる所なり然るに氏や袖につゝむ喜びも今ハ色を打出て喜ばるゝまを子が勞したる功の現れたるなりと存せれば涙も袖に露となす向後ハ志を併し以て此大法を守護し富國強兵の上意を報ひん氏も宜敷努力し玉へ

明治廿四年三月廿七日 印刷  
同年三月廿九日 出版

定價拾貳錢

著者

島根縣平民

岡本 法 浣

大阪府西成郡野田村三百三十六番屋敷甲田恒太郎方寄留

發行者

大阪市平民

堀江 虎 之 輔

大阪市東區高麗橋五丁目二十二番屋敷

印刷者

森 祐 好

大阪府下東成郡天王寺村貳千貳百五拾六番屋敷

發兌人

中 村 彌 七

大阪市東區本町四丁目三十二番屋敷

印刷所

感 化 保 護 院

大阪府下大阪天王寺南門



